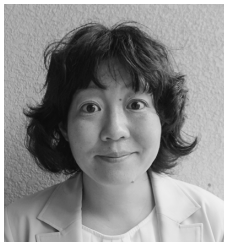
私の工夫

主体的に読み、根拠を明らかにして表現する児童の育成

～国語科における説明的な文章の学習を通して～

井原市立芳井小学校
細川　侑子



1　はじめに

本校児童の多くは素直に進んで学習に取り組むことができる。しかし、教師の指示を待つ姿勢の児童も多く見られ、学習に対する主体性が十分育っているとは言えない。また、令和3年度岡山県学力・学習状況調査の結果からは、国語科「読むこと」の領域において、精査・解釈に係わる問題の正答率が低いなど、全国的な課題と重なる部分があると考えた。そこで、これらの課題を踏まえ、本研究主題を設定することにした。

2　取り組みの実際

①主体的に読むための工夫と教師の支援

単元の導入で、第三次での言語活動を知らせたり、ほかの学習と関連付けた課題を提示したりした。その後、課題を達成するために必要な力は何か児童とともに考え、学習計画を立てることで、主体的に読むことができるように工夫した。

○【四年生】「アップとルーズで伝える」の実践例

この単元の導入では、教師が対比があることを使って書いた二つの文章を紹介し、どちらが分かりやすいかを考えさせた。対比があると、二つの事柄の特徴や自分の考えが伝わりやすいことを理解できるようにした。また、単元のめあてを『くわしく二つのことを説明するスピーチをしよう』と設定し、朝の会で「○と○」というテーマでスピーチを行うことを知らせ、テーマの例示を示すことで、対比を使ったスピーチをしたいという意欲をもてるようにした。

図1　単元のめあて・学習計画の確認

その課題を達成するためにどのような力を身に付ければよいか児童とともに考え、本教材の書き方の工夫を見付け、自分のスピーチに生かすという学習計画を立てた。

②　根拠を明らかにして表現するための工夫と教師の支援

児童が獲得し積み重ねてきた読み方を毎時間使えるように提示することと、思考を促す発問を工夫し、揺さぶり発問を設定し、児童の考えを深めることに取り組んだ。

○読み方の提示

「構造と内容の把握」では、説明文の段落の役割カードを作成し、カードを動かしながら構造や内容について考えた。そこから、初め、中、終わりの三つのまとまりに分け、文章の構成を捉えるようにした（図2～図3）。役割カードの中から選ぶことで、どの児童も考えをもつことができ、内容を把握するのに大変効果的だった。

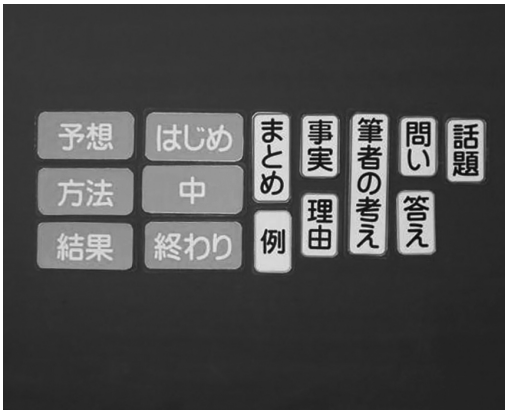


図２　段落の役割カード

図３　段落構成表を提示（５年生）

「精査・解釈」では、文章の内容や形式に着目して読み、目的に応じて必要な情報を見付けるために身に付ける力を教材レベルで考えた。第１学年及び第２学年では、時間や事柄の順序に関わって文章の中で重要になる語や文、読み手として必要な情報を適切に見付ける上で重要になる語や文を教材研究や指導案検討で話し合った。そして、授業の中で児童の発言を価値付け、まとめに位置付けた。（図４）次の時間には、その内容をカードにしたり、スライドにしたりして、一人一人が考えをもつ前に提示するようにした。

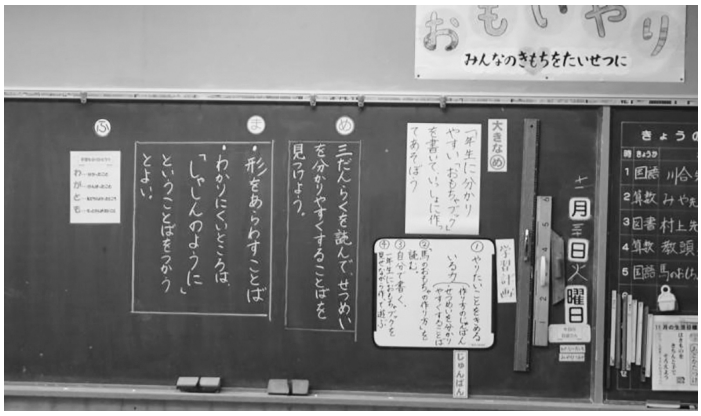


図４　新しく獲得した言葉をまとめにする（２年生）

他の学年でも、言葉を種類ごとに色を分けて線を引かせたり、○で囲んだり、線の種類を変えたりすることで、言葉のもつ意味について考えることができた。

③思考を促す発問の工夫

その時間で、必ず身に付けさせたい力は、揺さぶり発問を設定し、深く考えられるように工夫した。

・この時間に新しく獲得する読みは何かを考える。

・どのような発問をすれば児童の考えが深まるか吟味する。（書き方の共通点や相違点、事例の順番の意図）

授業では、児童からの発言に、「なぜ」「どうして」と切り返すことで、児童はそこで立ち止まり読みを深めることができた。また、「どこに書いてある？」「どこの文とつなげた？」と問うことで、本文の表現に必ずもどることを大切にした。グループ学習の時間を取り、しっかりと思考が深まるように意識した。

3　おわりに

本校では、単元の第一次第一時で、単元のめあてをつくり主体的に読む工夫について研究してきた。実践を重ねると、単元のめあてをつくるタイミングは、単元の途中にあることも考えられるのではないかという考えが出てきた。児童がより主体的に読むためには、大きいめあてを「いつ」「どのように」もてばよいか、今後も考察を重ねていきたい。

自分の考えやその根拠となる理由を話す力はついてきたが、短い字数でまとめ、書くことは課題である。読む力と合わせて、情報を整理する力やまとめて書く力も伸ばす方法を考えていきたい。